

『選択集』の教理構造基礎論（二）

— 第三章 —

角 野 玄 樹

〔抄 録〕

本稿を含めた一連の拙稿では、『選択集』全十六章の教理構造の基礎的議論をする予定である。その同書全十六章の中で、今回は、第三章を取りあげる。

『選択集』の内容は、様々な現代語訳や解説書などにより明らかにされているが、それでもなお、法然の意図について、不明瞭

な部分が諸所に見られる。その不明瞭な部分を明らかにするため、『選択集』の教理構造を説明し、法然の意図を浮き彫りにすることを目指す。

キーワード 法然、選択集、教理構造

第三章 『選択集』第三章の教理構造基礎論

『選択集』第三章の教理構造を検討する。前稿凡例に従い¹⁾、第三章の文を段落分けする。

(資料3)

- ① 弥陀如来～為往生本願之文 (42・3～4／317・8)
- ② 無量寿経上云～若不生者不取正覚 (42・5～6／317・9)
- ③ 観念法門引上文云～若不生者不取正覚 (42・7～43・2／317・10～11)

- ④ 往生礼讃同引上文云～衆生称念必得往生 (43・3～6／317・11～12)

- ⑤ 私云一切諸仏～四弘誓願是也 (43・7～44・1／317・13)
- ⑥ 別者如釈迦五百大願～弥陀別願也 (44・1～3／317・13～14)
- ⑦ 問曰弥陀如来～発此願乎 (44・3～4／317・14)
- ⑧ 答曰寿経云～妙土清浄之行〈已上〉 (44・4～46・6／317・14～318・4)
- ⑨ 大阿弥陀経云～結得是二十四願経〈平等覚経亦復同之〉 (46・6～47・5／318・4～7)

- ⑩ 此中選択者ゝ選択義如是 (47・5～48・1／318・7～・8)
 - ⑪ 双観経意ゝ准之応知 (48・1～・6／318・8～・10)
 - ⑫ 大約四十八願ゝ故云選択也 (48・6～49・3／318・10～・12)
 - ⑬ 第二不更惡趣願者ゝ故云選択也 (49・4～50・1／318・12～・14)
 - ⑭ 第三悉皆金色願者ゝ故云選択也 (50・1～・5／318・14～・16)
 - ⑮ 第四無有好醜願者ゝ故云選択也 (50・5～51・2／318・16～319・1)
 - ⑯ 乃至第十八念仏往生願者ゝ自余諸願准之応知 (51・2～53・4／319・1～・10)
 - ⑰ 問曰普約諸願ゝ為往生本願乎 (53・5～・7／319・10～・11)
 - ⑱ 答曰聖意難測ゝ二者難易義 (53・7～54・2／319・11～・12)
 - ⑲ 初勝劣者ゝ以為本願歟 (54・2～55・4／319・12～・16)
 - ⑳ 次難易義者ゝ能令瓦礫變成金〈已上〉 (55・4～59・7／319・16～320・11)
 - ㉑ 問曰一切菩薩ゝ將為未成就也 (59・7～60・2／320・11～・12)
 - ㉒ 答曰法藏誓願ゝ皆悉具足三十二相是也 (60・2～61・4／320・12～321・2)
 - ㉓ 如是初自無三惡趣願ゝ衆生称念必得往生〈已上〉 (61・4～63・3／321・2～・8)
 - ㉔ 問曰經云十念ゝ念声之義如何 (63・3～・4／321・8)
 - ㉕ 答曰念声は一ゝ念即是唱也 (63・4～64・3／321・8～・11)
 - ㉖ 問曰經云乃至ゝ其意如何 (64・3～・4／321・11)
 - ㉗ 答曰乃至与下至ゝ下取一念之故也 (64・4～66・7／321・11～322・1)
- 資料3の第三章では、『無量寿経』の第十八願文を取りあげ、専修

念仏の立証をしている。すなわち、選択本願念仏説による専修念仏の立証である。諸行を選捨し本願とせず、念仏のみ選択し本願とするこ
とにより、第二章で提示した専修念仏を立証するわけである。以下に
資料3の第三章の教理構造を明らかにする。

まず資料3①である。第三章の篇目である。阿弥陀仏が、余行を往
生の本願とせず、念仏のみを往生の本願とすると述べる。最初に、篇
目の中で、第三章の主題を提示し、そのあと、主題に関わる典拠の引
用をし、私釈の中で、その主題を立証・主張するという形式になって
いる。それは、おおよそ『選択集』における一様の形式である。

次に資料3②③④である。第三章の主題に関わる引用文である。
『無量寿経』の第十八願文、善導の『観念法門』『往生礼讃』の第十
八願釈文である。第三章では、第十八願の選択本願念仏説が主題で
あるので、その典拠である『無量寿経』の当該文をあげる。また、善
導の第十八願釈文では、「称我名字」「称我名号」とあるので、法然
の主張したい称名念仏が明示されている。故に、善導の釈文もあげる
のであろう。

次に資料3⑤⑥である。ここから第三章の私釈であり、本願につい
て、総願と別願の二種があることを説いている。総願とは四弘誓願で
あり、別願については、釈尊の五百大願・薬師菩薩の十二上願などを
例としてあげ、『無量寿経』の四十八願も、弥陀の別願であるとして
いる。

なぜ⑤⑥のように、総願・別願の話題を配置するのか、不鮮明のよ
うに思える。というのも、第三章のこれ以降の、選択説・念声は一

論・へ乃至「下至」の話題と、この総願・別願の話題は、あまり関係がないように思えるからである。その総願を⑤で説く目的・意義については、後論することにする。

ともあれ⑤で総願を提示しているが、そのみを提示するのでは、アンバランスなため、別願の説明もし、その別願を提示した流れから、弥陀の別願である四十八願の説示へと繋げるのである。

次に⑦～⑨である。問答形式になっている。阿弥陀仏は、いつ、どの仏のもとで、この願を発したのかと⑦で問うている。前の⑤⑥において、本願の話題となっており、阿弥陀仏の四十八願も提示した。それを承けて、その弥陀の四十八願には、どのようなわれがあるのかと問うているのである。

その答えとして、『無量寿経』と『大阿弥陀経』の文を引用している。その引用文では、阿弥陀仏が四十八願を発した時期や、どの仏のもとでのことを述べている。つまり、阿弥陀仏の四十八願の因縁内容を引用し、問いに対する答えとしている。

この⑦の問いにより、⑧⑨の阿弥陀仏の四十八願の因縁を提示する。そして、その⑧⑨の中に、阿弥陀仏の選択（摂取）が説かれており、その弥陀の選択を引き出すために、⑦の問いを設けたといえよう。

⑩。選択の語義が説かれている。前の⑨において選択の語が提示される。これより以降、選択説の詳論となる。まず、その選択の語義を、⑩でおさえているわけである。選択とは取捨の義であるとするが、これは、選択の有する意味から、十分、導出可能である。すなわち、選択とは、要は、選ぶことである。選ぶということは、取捨があること

になる。よって、選択を取捨と定義しうる。

そして同時に、『大阿弥陀経』の当該文の文脈でも、その取捨の語義が十分通用することを暗に確認していることにもなる。すなわち、「選択」のその語義（取捨）でもって、読み手が『大阿弥陀経』を読めば確認できる。これはつまり、法然の解釈する選択が、『大阿弥陀経』で十分通用することを暗に確認し、⑫以降の選択説の土台としているのである。

⑪。『大阿弥陀経』の選択は、⑧における『無量寿経』の摂取と同義であると説明する。

〈無量寿経〉の中で、法然が『選択集』で主に扱うのは、伝康僧鑑訳の『無量寿経』であるので、『大阿弥陀経』の選択の内容は、『無量寿経』にも存することを確認し、同訳『無量寿経』を議論の中心に置いたとしても、選択説が十分通用することを示しているのであろう。

摂取とは、「おさめ取る」という意味であるが、『無量寿経』の文脈から、選ぶという意味になるということであらう。すなわち、「摂取二百一十億諸仏妙土清浄之行」と、「二百一十億の諸仏の妙土の清らかなものをおさめ取る」とあり、その前の「広説二百一十億諸仏刹土人天之善悪国土之微妙」の文を併せれば、これらの文脈から、諸仏の国土における様々な微妙なものから、清らかなものを選び取るということになるであらう。よって、選択とは摂取といいうるであらう。³⁾

⑫～⑮。ここからの⑫～⑮及び⑯までは、第一願・第二願・第三願・第四願・第十八願の選択の説示である。前の⑩⑪において、阿弥陀仏の四十八願の因縁から、選択へと焦点を絞り、その選択について

詳論している。すなわち、阿弥陀仏の四十八願の因縁の中で、選択（摂取）という行動を阿弥陀仏（法蔵菩薩）がしている。そこで、具体的に、どのような選択を行っているのか、第一願～第四願及び第十八願を例に出し、説明しているのである。

そのうち、⑫では、第一願の選択について述べている。第一願は、無三惡趣の願であり、阿弥陀仏が建てる浄土は、三惡趣のない国土であることを願うものである。

法然は、『無量寿經』に説かれる無三惡趣の願について、前の⑧で引用した『無量寿經』の内容と連結する。すなわち、この無三惡趣の願は、二百一十億の国土の中から選択した内容であるとするのである。つまり、二百一十億の国土の中から、三惡趣のある国土を選捨し、三惡趣のない国土を選択し、その選択した三惡趣のない国土という要素を、第一願に設けるというものである。

そのあと、第二願・第三願・第四願の選択の説示がある。⑫と同様に、前の⑧の『無量寿經』の内容、つまり、二百一十億の国土の中から阿弥陀仏が選択したという内容と、各願を連結し、そこから、選択・選捨の内容を導き、各願の建立過程を説明している。

上記の⑧の二百一十億の国土の選択（摂取）と、四十八願の各願と連結するのは、同じ『無量寿經』の文であり、同經の流れから、十分整合的で納得できる解釈といえよう。これらの例示により、同經内で四十八願の選択が成立することを立証しているといえよう。そのような例示により、肝心要の第十八願の選択も、十分通用するものであることを傍証しているのである。

⑬。第十八願の選択である。⑫～⑮と同様に、前の⑧の『無量寿經』の、二百一十億の国土から選択したという内容と、第十八願とを連結して、同願の選択を説示している。すなわち、二百一十億の国土では、六波羅蜜や菩提心・六念等々の諸行を往生行とする国土があるなどと説き、それらのうち阿弥陀仏は、往生行を諸行とする国土を選捨し、往生行を専修念仏とする国土を選択するという解釈である。要は、念仏と諸行の中から、往生行として、諸行を選捨し、専修念仏を選択するということである。そして、専修念仏を第十八願に設けて同願が立てられていると、法然は解釈している。

この⑬により、法然が本章で最も主張したい、〃往生行とするならば専修念仏である。〃という内容を示しているのである。つまり、⑬において、

（資料4）

乃至第十八念仏往生願者於彼諸仏土中或有以布施為往生行土或有以持戒為往生行土或有以忍辱為往生行土（中略）如是往生行種々不同不可具述也即今選捨前布施持戒乃至孝養父母等諸行選取専称念仏故云選択也

とある。例えばこのうち、「或有以布施為往生行土或有以持戒為往生行土……」などとあるが、これらの表現では、往生行という要素を共通して示している。ということは、往生行という要素を予め共通して固定していることになり、その上で、諸仏の国土での行の例を示している。その行の例が、六波羅蜜であったり、菩提心・六念などや念仏の行である。つまりここでは、往生行という要素を予め共通して

固定しているので、ここでの議論では、往生行という要素が前提である。換言すれば、阿弥陀仏（法蔵菩薩）は、第十八願で専修念仏を結論として導く際、その前提を往生行としているのである。そして、阿弥陀仏（法蔵菩薩）の選択の対象の様々な行も、ここでの議論の前提といえる。なぜなら、ここでの結論は専修念仏であり、その結論に対する前提は、選択の対象の行であるからである。つまり、阿弥陀仏（法蔵菩薩）が、前提である様々な行の中から、専修念仏を結論とする論の流れとなっているからである。そして、往生行という要素と、選択の対象の行という要素とは、ある意味、同じものともいえるので、この二つの要素をまとめて、往生行を前提にしていると端的にまとめることができる。

そして、資料4に「即今選擇前布施持戒乃至孝養父母等諸行選取專称仏号故云選択也」とあるので、前提（往生行や、様々な選択の対象の行）に対する結論は、先にも少し述べたように、諸行を選捨し、専修念仏を選取することである。つまり、資料4の論の流れから、阿弥陀仏（法蔵菩薩）は、往生行を前提にして、専修念仏を結論としているといえる。すなわち、

（資料5）

往生行とするならば、専修念仏である。

という論理構造を構築しているといえるのである。また、選捨のほうでは、

（資料6）

往生行とするならば、諸行ではない。⁽¹⁾

ということになる。

この「往生行とするならば、専修念仏である。」という論理構造は、『選択集』において、極めて重要である。

まず、この論理構造により、専修念仏を導出している。

また、この論理構造は、第十九願・第二十願の選択についても、暗に限定を与え、本願の行を念仏のみに絞り込む、あるいは、本願の中心を念仏とする役割もある。それに伴い、念仏は本願の行、諸行は非本願の行とする区分も生じうるのである。

このうちまず、第十九願・第二十願の選択との関連を簡潔に考察し、本願の中心が念仏であることを明らかにしてみたい。以下の議論は、実は、前稿で残った課題を解決するものでもある。すなわち、『選択集』第二章では、専修念仏を正定之業とし、それは、本願に従うからとするが、なぜ、第十九願・第二十願がある中で、本願に従うことにより、専修念仏が正定之業（中心的に定めたところの業）といえるのか、その解答（法然の教えの立場での解答）を以下で示したい。

第十九願・第二十願の文は、順に以下のとおり。

（資料7）

設我^レ得^レ仏、十方衆生、発^シ菩提心、修^シ諸功德、至心発願欲^シ生^ニ我國、臨^ニ壽終時、仮令^モ不^レ与^ニ大衆、圍繞^ラ現^ニ其人、前^ニ者不^レ取^ニ正覚^ヲ。

（資料8）

設我^レ得^レ仏、十方衆生、聞^テ我名号、係^テ念我國、植^ユ諸徳本、至心回向欲^シ生^ニ我國、不^ニ果遂^セ者不^レ取^ニ正覚^ヲ。

資料7の第十九願の文では、衆生の発菩提心や修諸功德によって、臨終の時、仏の来迎があることを誓っている。資料8の第二十願では、衆生の聞名・係念・植諸徳本・回向などにより、往生することを誓っている。

『選択集』第三章では、第一願・第二願・第三願・第四願・第十八願の選択を説いている。しかし、これら第十九願・第二十願の選択は特に説いていない。これは、『逆修説法』でも同様で、やはり、第十九願・第二十願の選択を説いていない。よって、両願の選択がどのようなものか、ハッキリとはわからない。しかし、推測は可能のように考える。

仮に、第十九願や第二十願の選択を以下のように想定してみよう。まず第十九願である。第十八願と同じように、来迎の行を前提に、諸行（発菩提心・修諸功德）を選択し本願とするとしてみよう。つまり、（資料9）

来迎の行とするならば、諸行である。
ということである。

また、第二十願も、それと同じように、往生行を前提に、諸行（聞名・係念・植諸徳本・回向）を選択し本願とするとしてみよう。^⑦つまり、

（資料10）
往生行とするならば、諸行である。
第十九願では、来迎が利益となっているが、しかし、来迎は往生に繋がるものであるので、両願を併せると、

（資料11）

（来迎・）往生行とするならば、諸行である。
となる。しかし、資料9～11は、前記の第十八願の選択の資料5・6と両立せず、矛盾する。矛盾することを阿弥陀仏（法蔵菩薩）がするはずがない。よって、第十九願・第二十願の選択は、資料9～11のような内容ではないことになる。

そこで、両願の選択は、以下の如く推測する。すなわち第十九願では、諸行をして、来迎するか否かを選択するならば、来迎することを選択し本願とするということになる。つまり、

（資料12）

諸行をするならば、来迎がある。

また第二十願では、諸行をして、往生するか否かを選択するならば、往生することを選択し本願とするということになる。つまり、

（資料13）

諸行をするならば、往生する。

両願の選択をまとめると、以下のようなう。

（資料14）

諸行をするならば、（来迎があり、）往生する。

この第十九願・第二十願の選択（資料12～14）ならば、第十八願の選択（資料5・6）と十分両立しうる。資料5の第十八願の選択では、専修念仏を主張しているといえる。一方、第十九願・第二十願の選択では、諸行で来迎があり往生する事態を示しているといえる。両者に矛盾はない。^⑧

ただし、ここで注意すべき点がある。『選択集』でも『逆修説法』でも、第十九願・第二十願の選択の記述がないことは先に指摘した。もし、第十九願・第二十願の選択（資料12～14）を表記してしまうと、問題が発生するのである。すなわち、資料12～14の両願の選択の内容を、諸行で来迎があり往生する事態として捉えるのではなく、主張・勧めとする見方も可能である。つまり、資料12～14を表記することにより、諸行往生を主張し勧めているようにも見てしまうのである。例えば、『諸行で往生できますよ。』と述べた場合、諸行で往生できる事態を示しているとも見えるが、一方では、諸行往生を主張・勧めているようにも見えてしまうのである。仮に、後者の諸行往生の主張・勧めと理解してしまうと、第十八願の選択（資料5・6）と両立できなくなり、矛盾する。第十八願の選択では、要は、専修念仏のみ主張し、諸行を主張しないわけなので、諸行往生の主張・勧めと矛盾してしまうのである。

そして、後論も併せて考えると、選択説の明示というのは、主張・勧めというニュアンスを持つものである。故に、第十九願・第二十願の選択を表記してしまうと、諸行往生の主張・勧めということになってしまうのである。

そこで法然は、そのような矛盾を回避すべく、第十九願・第二十願の選択を、意図的に表記しないことにしたのである。全く両願の選択を表記しないならば、諸行往生の主張・勧めのニュアンスを消すことができるのである。

例えば、『諸行で往生できますよ。』と明言してしまうと、諸行往生

の主張・勧めが発生してしまうが、この『諸行で往生できますよ。』を全く発言しないならば、諸行往生の主張・勧めのニュアンスは消えてしまうであろう。

かくして、法然は、諸行往生の主張・勧めのニュアンスを消すため意図的に、第十九願・第二十願の選択の表記をしていないのである。^①

さて、このように、第十八願・第十九願・第二十願の選択の内容を確認すれば、前稿で残った課題を解決できる。すなわち、『選択集』第二章に引用する善導の一心専念弥陀名号の文における専修念仏が正定之業である根拠について、順彼仏願故とある。しかし、本願には第十九願・第二十願もあるため、なぜ本願に依って専修念仏が正定之業（中心的に定めたところの業）となるのか、よくわからないことになってしまうのであった。^②この課題をここで解決したい。

正定之業である専修念仏は、往生行であり、正行も同様である。故に、何を正定之業にするのかを決定するために、本願を参照する際、その前提は往生行となる。なぜなら、正定之業とは往生行なので、その往生行の範囲に話題が絞られる。よって、何が正定之業かを決めるために本願を参照する際、往生行が前提となり、そこに範囲が絞られる。本願について、往生行を前提とすれば、まず、往生行を説く第十八願・第十九願・第二十願に範囲が絞られる。しかし実際に往生行を前提にしているのは、第十九願・第二十願の選択説ではなく、第十八願の選択本願念仏説であり、ここでは、諸行を捨て、専修念仏を結論として説いている。以上の本願の構造の中心は、専修念仏となる。その専修念仏を中心とする本願を参照すれば、専修念仏が正定之業（中

心的に定めたところの業」となるわけである。

かくして、専修念仏が正定之業（中心的に定めたところの業）である根拠に、本願がなりえることになるのである。このような構想があったので、『選択集』第二章の草稿資料⑨で、「なぜ、五種正行の中で、称名を正定之業とするのか」という問いに対し、「順彼仏願故」と答え、「其仏本願義至下可知」と述べるのであろう。つまり、本願に依るとして、その本願の詳細は第三章で議論することであろう。その詳細な議論が、上記の選択本願念仏説の内容ということであろう。同説を踏まえれば、上記の本書第二章の問いに答えられるということであろう。^⑪

⑪⑫。問答形式となっている。問いの内容は、なぜ第十八願では、善行である諸行を選捨し、念仏一行のみを選取し本願とするのか、ということである。それに対する答えの内容は、聖意は推し量りがたく、容易に理解できないが、試みに、勝劣義・難易義によって理解してみ、とする。

⑬の問いは、自然な問いといえよう。確かに、諸行は善行なので、なぜ選捨するのか、また、よりによって、なぜ念仏一行を選取するのかという疑問は残る。それを解決するため、法然は、勝劣義・難易義を導入する。つまり、この二義によって、右記の疑問を解決し、専修念仏が第十八願文に含まれている理由を明らかにしようとしているのである。

そして⑭の答えでは、勝劣義・難易義を提示する。これは、のちの⑮⑯の二義の道筋をつけるものである。

⑮⑯。勝劣義では、名号万徳所帰を説き、念仏が勝れ、諸行が劣っているとする。難易義では、念仏は誰でもできる容易いものであるとし、諸行は誰でもできるわけではないので、難しいとする。これら二義により、弥陀は、念仏一行を選取し、諸行を選捨しているとする。

勝劣義では、名号が焦点となっており、これだけならば、称名ではなく、観念の念仏や、意念のみの念仏も該当しうる。仮に観念の念仏や意念のみの念仏を導出してしまうと、法然が主張したい称名念仏一行を主張できないことになってしまう。そこで、難易義が必要になる。すなわち、難易義の易とは、観念や意念のみの念仏ではなく、称名念仏のことであるので、この難易義ならば、称名念仏を導出できる。難易義により、観念の念仏を除外する。また、単なる意念より称名念仏のほうが、凡夫にとって集中しやすいので、比較的しつかりと念仏ができる。よって、むしろ称名念仏のほうが易となるので、単なる意念も除外できるのである。

しかしそれならば、ここでは、勝劣義は不要で、難易義のみで十分のようにも考えてしまう。なぜ、勝劣義も説くのであろうか。

以下のように考えるべきである。以前、拙稿で述べたことがあるが、浄土宗を標榜する『選択集』においては、その要である念仏が、諸行よりも勝れている点を立証しないといけない。そのため、勝劣義により、念仏が勝れ、諸行が劣ることを説いているのである。これにより、浄土宗を立証しているのである。換言すれば、この⑬の問いでは、なぜ念仏一行を選取し、諸行を選捨するのかと述べており、ある意味、本書における、浄土宗の要（念仏）の存在意義が問われている。これ

はつまり、浄土宗の存在意義が問われているのである。故に、この⑰～⑲の問答での議論は、いわば、浄土宗の立証の議論でもあるので、浄土宗の勝を立証する勝劣義を提示するのである。したがって、『選択集』の立場上、難易義だけではなく、勝劣義も必要なのである。¹⁴

ここで、勝劣義・難易義を含む選択本願念仏説において、いかに専修念仏を立証しているのか、確認してみたい。第一章からの流れを簡単に振り返り、第三章の第十八願文解釈を検討しよう。

まず『選択集』第一章で、仏教を二分し聖浄二門を立て、浄土門に入るべきことを説く。いきなり専修念仏を提示するのは唐突すぎるので、まずは仏教を聖浄二門に分け、浄土門に範囲を絞る。

次に第二章で、浄土門の中から正雑二行を示し、正行や正定之業の専修念仏を主張する。第一章にあるように（前稿資料1⑧）、浄土門とは往生浄土門である。つまり、往生浄土を勧める教えである。往生浄土という行為を強く勧める故、いかに往生するのかに焦点が絞られ、往生行の話題へと移るのである。それを議論するのが第二章ということである。その第二章を承けて第三章が配置される。すなわち、第二章の専修念仏の提示に対し、その専修念仏を立証するのが、第三章の重要な役割の一つである。¹⁵そして、第一章では、浄土正依経の立場を宣言しているので、専修念仏を立証する第三章以降では、浄土三部経が中心的議論の場となる。『無量寿経』から取りあげ、本願について議論している。阿弥陀仏の教えの根幹は本願といえ、その根幹の本願から議論をしているわけである。その本願では、無論、念仏が説かれる第十八願が中心である。

その第十八願文には、「十念」とあり、行としては、念仏のみが説かれていると解釈可能である。¹⁶しかし、この第十八願文だけでは、念仏以外の行をしてはいけないとは記していないので、念仏に他の行を加えるということも、論理的にはありえる状況である。

そこで法然は、選択説において、念仏のみを選択し、諸行を捨捨するとして、念仏のみを本願とすることによって、その第十八願の念仏は、諸行が排除された念仏という意味づけとなる。そして、『選択集』の最初のほうで、「南無阿弥陀仏」（前稿資料1①）とある。阿弥陀仏の教えに帰依することを読み手に促している。読み手がそれを真剣に受けとめて、選択本願念仏説のここでの内容を読み取れば、その読み手は、弥陀の意図に沿って、その念仏を修める場合、諸行を排除した念仏、つまり、専修念仏を行ずることになるのである。

第三章では、『大阿弥陀経』や『無量寿経』などの文から、阿弥陀仏（法蔵菩薩）が、四十八願を立てる際、選択という行動をしていることを導出する。その選択とは、善悪・醜好・麁妙などを選びめぐり、悪いものを捨て、善いものを本願とするものである。この選択は、第十八願でも当然なされている。四十八願全体で選択がなされていると解釈可能なため、第十八願でも選択がなされていると導出できる。同願でも、善悪・麁妙などの選びがなされていると理解でき、それが、念仏と諸行との選びである。同願の選びの対象が、往生するか否かということもありえるが、しかし、念仏を前提にするのは恣意的故、やはり、選びの対象は、念仏と諸行のほうが、自然である。

第十八願では、念仏と諸行との選びの結果、念仏を選ぶのであるが、

しかしここで、なぜ、念仏を善妙とし、諸行を麁惡としうるのか、疑問が出る。諸行も立派な善行であるので、なぜ麁惡といえるのであろうか。そこで提示されるのが、勝劣義ということである。名号万徳所帰の理論により、念仏よりも比較的、諸行が劣となる。これにより、念仏の善妙・諸行の麁惡を立証しているのである。

また、名号の功德の勝だけでは、称名までは必然的にはいえないので、難易義を提示し、称名の専修念仏の導出を確かなものとしているのである。

こうして、選択説の導入により、第十八願文には明記されていない、諸行の選捨を導出しているわけである。そして、勝劣義・難易義がそれを根拠づけているのである。これらにより、専修念仏を立証しているのである。¹⁷⁾

ところで、上記の⑤の議論で、なぜ⑤において四弘誓願を提示するのかについて問題提起した。その答えを詳しくここで述べておきたい。

まず、もし四弘誓願の一つの度がないと、阿弥陀仏（法蔵菩薩）の選択に、衆生を救うためというニュアンスが薄くなってしまう。そうすると、阿弥陀仏の選択説を、阿弥陀仏がかくの如き内容の行動をしたという、単なる事態と捉えることも、一応可能のように見える。もしそうなってしまうと、選択説が、衆生に主張し勧める教えとならなくなってしまう。ならば、選択本願念仏説による専修念仏の勧めも成り立たなくなってしまう。また、第二章では明らかに専修念仏を主張し勧めており、第三章で専修念仏の主張・勧めも含めて明らかにしないと、第二章の専修念仏の立証がでなくなってしまう。

そこで、⑤において、本願に総願・別願の区別をし、その総願に四弘誓願を示すことにより、度という主張をするのである。別願は総願と一体であり、総願の精神に基づいて別願があるといえる。よって、衆生を救うための願いである度の主張という内容が、選択説に加わることになり、ならば、その選択説は、弥陀が衆生に対して救おうとする願い・教え・訴えとなり、衆生を救うための弥陀の主張・勧めとなるのである。かくして、阿弥陀仏の選択説は、単なる事態とはならず、衆生に主張し勧める教えとなり、専修念仏の勧めも可能となるのである。¹⁸⁾

次に、⑤における四弘誓願の残りの、断・知・証の役割についてである。四弘誓願とは、衆生無辺誓願度・煩惱無辺誓願断・法門無尽誓願知・無上菩提誓願証などと一般的に理解されている。例えば、源信『往生要集』大文第四にも説かれている。¹⁹⁾これらの四つの願いは、最高の願いといえる。すなわち、それぞれの願いに、「無辺」「無尽」「無上」などと記されている。度・断・知・証について、最高の願いをしていえるといえるであろう。前述のように、総願と別願は、本願として一体であるといえ、総願の精神に基づいて別願が成立しているといえる。故に、総願で最高の願いを発すならば、別願でも最高の願いを発すはずである。その最高さを示す要素が、『選択集』では、選択ということなのである。阿弥陀仏（法蔵菩薩）が、選りすぐりの最高の願いを発こしているという教説が、四十八願の選択説なのである。²⁰⁾

つまり、⑤において、四弘誓願を示すことにより、阿弥陀仏が最高

の願い（四十八願の選択）を発こすという流れを構築しているのである。換言すれば、⑤において、四弘誓願を示すことにより、選択説の最高の選びの内容を自然に導出し下支えしようとしているのである。そしてそれは、勝劣義に繋がっていくのである。

しかし、それならば、既に、『大阿弥陀經』において、善惡・醜好の選びをしているので、その内容で、十分、最高の願いを確立しているように見える。故に、⑤における総願の最高の願いという要素までは不要なのは、という疑問もあるかもしれない。

この疑問については、以下のように考える。確かに、『大阿弥陀經』に、善惡・醜好の選びのありようが説かれ、『選択集』でも引用している。また『無量壽經』でも、善惡・醜妙の摂取も描かれている。しかしそれだけでは、最高の願いという要素は十分には確保できない。善惡・醜好・醜妙の選びでは、幾分、善・好・妙のものが選ばれ、最高のものは選ばれていないという道がまだありえる。これでは最高の願いとはならない。そこで、⑤において、総願では、最高の願いがなされていることを示し、総願と一体である別願でも、最高の願いがなされることになり、そこへ、選択説が合流すれば、その選択は、最高のものを選ぶということになるのである。同時に、善惡・醜好・醜妙の選択も、そのような意味となるのである。かくして、選択説において、最高の願いが選ばれるという要素を確保できるのである。したがって、⑤において、四弘誓願が必要なのである。

また⑧の『無量壽經』において、「無上殊勝之願」とあるが、⑨の『大阿弥陀經』には該当する語はない。したがって、やはり⑤にお

て四弘誓願を示し、最高の願いであることをハッキリさせる必要があるのである。

ここまで、選択本願念仏説の内容を検討した。勝劣義・難易義を含む選択本願念仏説には様々な役割があり、これまでの同説の検討を簡単にまとめておこう。ただし、選択本願念仏説には、助業などを許容する理論も存し、それは拙稿「法然教学における但念仏と専修念仏との相違」（『法然仏教学研究センター』二、平成二十八年三月）六頁下（七頁上で明らかにした。それも併せて、主なものを左記にまとめることにする。

〈選択本願念仏説の主な役割〉

A 称名の専修念仏の立証という役割。

B 専修念仏が正定之業であることを立証する役割。

C 念仏を本願、諸行を非本願とするという役割。

D 浄土宗の立証の役割。

E 助業や往生行ではない善行を許容する根拠の役割。

本稿などの文脈から、選択本願念仏説の主な役割を右記のようにまとめることができるであろう。²¹

②①～②③。問答形式となっている。四十八願は既に成就されているのか否かを問い、同願は既に成就されていることを、『無量壽經』の内容を根拠に答えている。特に第十八願の願成就文に注力して述べている。

ここまで、四十八願の選択が説かれ、特に第十八願では、選択本願念仏説が提示されている。もしこれらの願が成就しないなら、これら

四十八願の選択の教えは、有効とはならない。なぜなら、法蔵菩薩が仏にならなければ、極楽浄土も存在しないし、念仏往生の救いもない。そこで、これら四十八願は全て有効で、弥陀や極楽の存在を確保し、念仏往生の救いもあることを確保するため、②①②③において、四十八願の願成就について、『無量寿経』の内容を根拠にして述べているのである。

②④⑤。問答形式となっている。『無量寿経』の第十八願文では、「十念」となっているが、善導の解釈文では、「十声」となっており、これらの意味はどうなっているのか、という問いである。答えとして、念声は一を説く。つまり、「念」とは、念じることと声に出すことの両方の行為を指し、「声」とは、声に出すことと念じることの両方の行為を指し、「念」と「声」の意味は同じであるとする。

法然にとって、念仏とは、称名の念仏である。それを明示するため、ここで念声は一を説くのであろう。また、『選択集』第三章の引用文②③④で、第十八願文と善導の釈文が並記されている。これら文を並べると、「十念」と「十声」の相違があり、ならば自然と②④のような問いが生じるだろう。このように、自然な問いが生じる状況故、その機会を捉えて、この第三章で、念声は一の議論をするのであろう。

そして、その念声は一の根拠として、『観経』下品下生文や、『大集経』の文や、懷感『群疑論』の文をあげる。まず、『観経』の文では、「声を絶えさせないようにし」とあり、そうして、「具足十念」し、「称南無阿弥陀仏」とある。故に、「十念」は「声を絶えさせない」の影響下にあるとも読めるので、十念とは念じつつ声に出して称える

ことになりえる。そして、「称南無阿弥陀仏」と臨終行者がするところだが、この「称南無阿弥陀仏」も、文脈上、声に出しつつ念じることであろう。この読み方ならば、「念」と「声」の意味が合致するといえる。

次に、『大集経』と『群疑論』の文だが、大念では大仏を見ることになり、小念では小仏を見ることになると同経にはある。これを解釈した文が『群疑論』の文であり、大念とは大声念仏、小念とは小声念仏とする。この『群疑論』の文により、念と声が通用であると解釈し、念声は一の根拠とすることであろう。

右記の諸根拠からわかるように、「念」と記されていれば、念じつつ声に出すということにもなりえ、「声」と記されていれば、声に出しつつ念じることにもなりえる。『選択集』では、善導の教えに依って、そのような念声は一の立場で議論を進めるということであろう。

②⑥⑦。問答形式となっている。『無量寿経』の第十八願文では、「乃至」となっているが、善導の釈文では、「下至」となっており、両者の意味はどうなっているのか、という問いである。その解答として、「乃至」も「下至」も、この場合、同じ意味であるとする。つまり、「乃至」の意味は、多から少へ向かうことであり、この場合、上尽一形下至十声一声である。「下至」の語は、この場合、上に対する下であり、上から下へという意味であるので、やはり、上尽一形下至十声一声の意味を含んでいる。したがって、「乃至」と「下至」の意味は、この場合、同じといつてよいということである。

このような議論をする理由は、乃至十念とはどのような念仏かにつ

いて、立場を明らかにするためであろう。つまり、②⑦の文にもあるように、「十念」とは、仮に十念往生の願という解釈文の場合、願文に他でもなく「十念」と記されているので、特別の十念でないといかないという解釈もありえる。しかし、法然の立場はそうではない。法然の念仏は、基本的に一生涯の念仏故、②⑦にあるように、上尽一形下至十声一声の念仏ということである。十念でないといけないのではなく、上尽一形下至十声一声の念仏であることを明確にするため、②⑥②⑦の議論をしたと考えられる。つまり、「乃至」と「下至」の表現が異なる故、自然な疑問が生じうる。そこでその問いをおこし、それに解答することを通じて、上尽一形下至十声一声の念仏という、法然自身の立場を明確にしたかったのであろう。

②⑦の議論の流れを検討しよう。「乃至」の意味、「下至」の意味を確認し、両者の意味が、この場合、同じであるとする。そして、その例として、四十八願のうち、第五願の宿命通の願文をあげ、「下至」の語の意味を確認している。善導も同じ意味で用いているとおさえたい。そして、諸師の第十八願の解釈では、十念往生の願の意味づけで解釈がなされており、その解釈文の場合、往生するには、願文に他でもなく「十念」と記されているので、特別の十念でないといけないという諸師の理解があることを示唆する。それに対し、善導の解釈では、念仏往生の願の意味づけで理解がなされており、特別の十念でないといけないという理解ではなく、上尽一形下至十声一声の範囲で、とにかく念仏であれば往生するという理解を示し、念仏の期間や数についての法然自らの立場を表明しているのである^{②③}。

〔注〕

(1) 拙稿『選択集』の教理構造基礎論(一)——第一章・第二章——
『佛敎大学仏敎学部論集』一〇一、平成二十九年三月)二〇頁上参照。本稿は、右記前稿の続篇である。本稿を含む一連の拙稿の方針や目的などは、その前稿を参照されたい。

(2) 「清浄之行」の「行」は、この場合、「修行」という意味ではなく、「形成されたもの」という意味であろう。少なくとも、法然はそのように理解していたであろう。換言すれば、そのように意味を取らないと、この⑧④⑪辺りの文を整合的に理解できないであろう。

(3) ちなみに、「摂取」の語は、本書第七章にも出ており、その摂取とは、「守り救い取る」という意味で用いられている。同じ摂取という漢語であるが、文脈によって意味が異なっているといえる。つまり同語は「おさめ取る」が大枠の基本的意味といえ、その基本の意味が、文脈によって変化するわけである。換言すれば、文脈によって、同語の大枠の意味に含まれる一部の語義に絞り込まれるのである。それでは、どのような文脈により、同語の意味が異なるのか、少し考察してみたい。

本書第三章の摂取とは、選択の意味であると法然は説いている。その同章の摂取は、「思惟摂取莊嚴仏国清浄之行」や「摂取二百一十億諸仏妙土清浄之行」などと出る。いづれにせよ、摂取の目的語は、二百一十億の国土の清らかなものということである。この文脈により、摂取(おさめ取る)という漢語は、「二百一十億の国土の清らかなものをおさめ取る」という上記の傍線部Aを目的語とするニュアンスのおさめ取るに容れる。また、『無量寿経』には、「広説二百一十億諸仏刹土人天之善惡国土之微妙」とあり、この文は文脈上、摂取に関わる文である。故に摂取とは、「二百一十億の国土の善惡微妙の中から清らかなものをおさめ取る」という上記の傍線部Bを目的語とするニュアンスにも容れる。つまり、これら目的語などが、摂取の語に含まれている数々の意味から範囲を絞り込み、意味を限定化しているのである。更に、伝康僧鑑訳『無量寿経』と『大阿弥陀経』とが同本異

訳である事実と、両経典を関連づけるという本書の文脈から、「摂取」に該当する「選択」は同じ意味となりうる。そして実際、「摂取」と「選択」の語は同じ意味でありえる。というのも、上記の「二百一十億の国土の善悪微妙の中から清らかなものをおさめ取る」の「おさめ取る」という意味は、上記の傍線部Bを目的語とする文脈上、選ぶ(選択)という意味になりえるからである。こうして、上記の文脈が利いて、おさめ取るという基本の意味から、選択するという意味に変化しうるのである。

次に、本書第七章の摂取の文脈である。摂取の語は、同章篇目などに説かれる。その篇目の摂取は、明らかに『観經』摂益文由来の語である。その同経摂益文には、「光明遍照十方世界念仏衆生摂取不捨」(『浄全』第一卷四四頁)とある。摂取の目的語は、念仏衆生であり、この文脈から、「念仏衆生をおさめ取る」という上記の傍線部Cを目的語とするニュアンスの摂取に基本の意味から変容する。また、同経同文では、「光明遍照」とあり、この影響下に摂取の語はある。そして、光明とは、一般的に仏の智慧や慈悲の象徴である。この文脈から摂取とは、「智慧や慈悲のおさめ取り」というニュアンスになる。更にこれを展開すれば、「正しい救いのおさめ取り」ともいえるよう。また、摂益文を解釈する善導『観經疏』『観念法門』の文を法然は引用している。その善導『観經疏』では、「問曰備修衆行但能回向皆得往生何以仏光普照唯摂念仏者有何意也」(『浄全』第二卷四九頁上)と、念仏以外の行でも往生できるのに、なぜ念仏者のみ摂するのかと述べている。この文では、「摂」の背景に往生の要素が存している。「摂」が往生に繋がるものであることがわかる。この文が摂益文に関わる文脈から、摂取に、往生させるという意味も付加される。浄土宗の教えでは、弥陀が衆生を往生させるということは、弥陀が衆生を救うことを意味しよう。また、『観念法門』では、摂益文の「摂取不捨」を、「摂護不捨」(『浄全』第四卷二二八頁下)と解釈する。この文脈から、摂取に、「おさめ守る」という意味も付加される。

これらの文脈を統合すれば、摂取とは、「守り救い取る」という意

味となる。つまり、おさめ取るという基本の意味から、上記の文脈により、「守り救い取る」という意味に変化するのである。

かくして、同じ摂取という漢語で、おさめ取るという基本の意味から、本書第三章と第七章のそれぞれの文脈により、選択するという意味や、守り救い取るという意味に変化することが理解できるであろう。換言すれば、おさめ取るの意味に含まれるものの一つが、選択するという意味であり、また別に含まれるものの一つが、守り救い取るということである。それぞれの文脈により、それぞれの意味が導出されるということである。このように、同じ語であっても、基本の意味を基軸に文脈により意味が変化するということである。つまり文脈により、語や文や要素などが互いに関係し合い、語などの意味を互いに限定し合い、各語などの意味を決定するのである。

このようなことは、摂取の語に限ることではないだろう。基本的に、仏教文献の用語全般に渡ることであろう。すなわち、仏教文献の用語には数多くの語があるが、同じ語であっても、異なる意味が含まれる場合が多く見られる。例えば、「法」という語には様々な意味がある。このように同じ語であっても、意味が複数ありえるのは、文脈によるものとひとまずいえるであろう。

(4) 諸行往生ができないという意味ではない。往生行として諸行を主張しないという意味である。

(5) 『浄全』第一卷七〇八頁。

(6) 『浄全』第一卷八頁。

(7) ここで、係念や回向を純粹に諸行といってよいのか、疑問に思われるかもしれない。しかし、第二十願では、聞名・係念・植諸徳本・回向を全て行うものであらうと考えられるので、これら全てを含めれば、念仏のみではなく、植諸徳本もあるので、「諸々の行」つまり、諸行といえる。

(8) 例えば、或る和菓子屋A店でのお勧めが、ようかんだとしても、無論、その他の和菓子を食べられないわけではない。十分その他の和菓子も食べられるが、お勧めがようかんのみだという状況は十分ありえ

る。

これと似たようなことで、勧めるのは専修念仏だが、その他の諸行でも往生できないわけではないという状況は十分ありえるのである。

- (9) ここまでの本文の選択本願念仏説の構造についての内容は、既に似たような議論を、拙稿『逆修説法』第三七日の本願解釈——選択本願念仏説・第十八願本体説・本願根本説——（『佛教大学仏教学部論集』九七、平成二十五年三月 四〇頁上〜四二頁下において示したことがある。右記の拙稿は、『逆修説法』の選択本願念仏説の検討であり、今回は、『選択集』の選択本願念仏説を論じたわけである。両方の選択本願念仏説は、近似しており、右記拙稿の内容も、本稿本文と似た議論となる。ただし本稿では、右記拙稿よりも説明を簡略にしている。

- (10) またもし、その「仏願」が第十八願のみのことならば、わかりにくい内容となってしまう。つまり、単に第十八願に依ったとして、なぜ、専修念仏が正定之業（中心的に定めたところの業）になるのか、不明瞭ということである。

しかし、弥陀の「仏願」とは、通常、四十八願全体が総願を含めてのものであろう。本文でもそのように理解し、議論を進めている。

- (11) さて、本文のように、選択本願念仏説の構造は、前提が往生行であり、結論が専修念仏である。それは、選択本願念仏説の文を見れば理解できる。しかし、法然の選択本願念仏説の構造には、別の構造の可能性はないのだろうか。つまり、前提が念仏であり、結論が往生というようなものはどうであろうか。もし成立するなら、法然の選択本願念仏説に必然性がなくなってしまう。換言すれば、法然の選択本願念仏説は、恣意的で、説得力に欠けるという批判も出るかもしれない。この課題について以下に考えてみよう。

もし、第十八願の選択説の前提が念仏で、結論が往生ならば、なぜ、念仏を前提にするのかという問題が生じるように思われる。往生するための行は様々であるはずである。それなのに、なぜ阿弥陀仏（法蔵菩薩）は、予め固定する前提をよりにもよって念仏とするのだろうか。

こちらのほうが、かえって恣意的であるように思われる。故に、第十八願の選択説を立てる場合、阿弥陀仏は、前提を往生行とし、結論を専修念仏とした、とするほうが自然である。したがって、右記の課題を解くことができるであろう。

ところで、『選択集』の、例えば第七章では、諸行を非本願の行とし、他にも、第十章・第十二章にも諸行の非本願の表現が見られる（『昭法全』三二七、三三六、三四三頁）。しかし、諸行は、第十九願・第二十願に説かれているので、非本願とするのは問題のように見える。故に、非本願とは、『第十八願ではない』という意味に取らざるをえないように思える。しかし、非本願の「本願」とは、通常、第十八願に限定されるものではなく、四十八願全体や総願・別願をまとめていうはずである。この論点については、『逆修説法』の第三七日の本願解釈——選択本願念仏説・第十八願本体説・本願根本説——（『佛教大学仏教学部論集』九七、平成二十五年三月 四二頁下〜四五頁上）に、この問題解決に近似した内容を発表したもので、そちらを参照されたい。

- (12) 観念の念仏も、弥陀の姿を觀じつつ、名号を念じれば、諸行よりも勝れた念仏に該当しうる。

- (13) 拙稿「法然の選択本願念仏説の成立——〈法然の教えの精神〉——」（『佛教大学仏教学部論集』一〇〇、平成二十八年三月）七七頁上〜下参照。

- (14) とところで、勝劣義の念仏が、観念や単なる意念も含むなら、それらも勝となるだろう。すると、浄土宗には観念や単なる意念も含まれることになる。しかし、法然の念仏とは称名念仏のほずである。この齟齬に見える事態をいかに考えるべきであろうか。

『選択集』において立てる浄土宗とは、同書第一章でも法然が提示していたように（前稿資料1⑤⑦参照）、法然以前から存在していた。故に、それらの浄土宗を含めれば、諸行よりも勝について、観念や単なる意念が含まれても、問題にはならない。また、第三章の勝劣義では、とにかく称名念仏が諸行よりも勝といえればそれで十分と見てい

と思われるので、そこに観念や単なる意念が含まれてもよいということであろう。法然の主張の肝の称名念仏は、難易義を加えれば導出できるので、勝劣義のみについては、とにかく念仏の勝がいればよいということであろう。

そして、右記のようでありつつ、称名の専修念仏の勝も確保できているので、独立した浄土宗の立証もなしえているのである。

- (15) 例えば既に安達俊英氏は、「法然浄土教における諸行往生の可否——『選択集』第二章・第十二章を中心に——」(『仏教文化研究』四一、平成八年九月)の論攷の三一頁上で、

そもそも『選択集』は最初の二章で、道綽・善導といった大師に基いて専修念仏の教えを一応提示した後、第三章以下でそれを経文によって証明してゆくという構成であると考えられる。

と、第三章以降は、専修念仏の立証がなされていると、簡潔に示されている。

- (16) ただし、「十念」の他に、「至心信樂欲生我国」という行為も存する。これはどういう位置づけになるのであろうか。

次のように法然は考えたのであろう。すなわち、「至心信樂欲生我国」は、念仏をしつかりと確かにするものということである。換言すれば、念仏といっても、でたらめな念仏では、ほとんど無意味である。やはり、念仏であるなら、凡夫の堪えられる範囲で、しつかりとした確かな念仏でないといけないだろう。その「しつかりとした確かな」の部分を担当するのが、「至心信樂欲生我国」ということである。このような心構えで念仏することが、しつかりとした確かな念仏であると法然は理解したのであろう。

したがって、第十八願文では、行としては念仏のみともいえ、「至心信樂欲生我国」の行為は、しつかりとした念仏の条件といえよう。つまり、「至心信樂欲生我国」は、しつかりとした念仏の中に含まれているのである。

ちなみに、三心・四修についても同様に、法然教学においては、念仏をしつかりとした確かなものとする条件であらう。

- (17) なお本文では、「専修念仏を立証」などと表現している。このような「立証」などの表現をするには、現代的に見て、もう少し、しつかりとした論理形式が必要かもしれない。これは、その他の七種の選択でも同様であり、「立証」というには、少し形式が整っていないようにも思われる。

しかし一方で、法然はどのような意図で八種選択を説いているのかといえ、単に、念仏を主張し、諸行を主張しないためのみ、というようにには思われないのである。法然の意図を積極的に受けとめれば、八種選択の議論は、専修念仏の立証であるように思われる。つまり、専修念仏を主張するのが法然の一番の目的であると知りながらも、八種選択を、単に念仏を主張し、諸行を主張しないためのものという理解は、かえって不自然のように思われる。法然の一番の目的を念頭に置けば、八種選択の議論は、積極的に受けとめれば、専修念仏の立証と見てよいように思われる。また当時では、十分それで通用していたと推測する。

- (18) この私見のとおりならば、第三章以外の他の章では、いかに仏の主張・勧めというニュアンスを示しているのだろうか。それについては、続篇で順次明らかにしていきたい。

なお本文で述べたように、選択説の明示により、当該文が主張・勧めの文となる。その点を踏まえて、前稿資料2⑨についての議論の補足をしておく。

「意云称名念仏是彼仏本願行也故修之者乘彼仏願必得往生也」と、称名念仏は本願の行故、それを修行すれば仏願に乗じて必ず往生できる」とある。すなわち、全ての衆生を救うという願いが第十八願文に含まれており、その上わざわざ選択本願として明示し専修念仏を勧めているので、当然、そのような弥陀の行動から、その専修念仏によって必ず往生することになるということである。よって、専修念仏を正定之業と呼ぶに相応しいということになりうる。

一方、諸行については、第十九願・第二十願の選択説の明示がないので、単に、諸行往生が可能な事態を認めているということであり、

諸行往生を勧めているわけではない。弥陀のそのような姿勢・行動から、諸行では往生不定であることを、暗に前稿資料⑨において示しているものと考えられる。

(19) 『浄土』第十五卷七〇頁上参照。

(20) 阿弥陀仏が、四弘誓願を発したことにより、最高の別願を發したというなら、四弘誓願を發すのは、諸仏も菩薩の時にするので、諸仏の別願も最高のものとなる。最高の内容は、環境や条件やその世界の価値観などによって、どのような最高かは異なる。諸仏によって最高の別願に違いがあるのは、そのような環境・条件・価値観の違いによるものであろう。

(21) 本文にあげた役割以外にも、色々な要素があるだろう。例えば、難易義に見られる平等往生という思想も重要であるが、これは本文にあげた役割でいえば、Bの「専修念仏が正定之業であることを立証する役割」に含まれるであろう。平等往生という思想は、専修念仏が中心であるという主張を支えているともいえる。すなわち、平等往生という思想により、専修念仏は誰にでも有効であることを示すことができ、それを前提としつつ、勝劣義が更に加われば、専修念仏が中心になる（正定之業）ということである。

ところで、選択本願念仏説には、凡夫という要素が特に含まれていないように見える。それどころか、『選択集』全体にも、凡夫という要素が意外に希薄である。これはなぜであろうか。

おそらく法然は、選択本願念仏説による専修念仏の立証を、この娑婆の全ての衆生に向けているものと考えられる。全ての衆生故に、凡夫だけでなく、例えば、聖人にも専修念仏を説いているつもりということである。選択本願念仏説では、特に凡夫という要素がなく、機根に関しては特に前提がない。故に、全ての衆生に向けたものと考えられるのである。

『選択集』の立場では、浄土宗立宗という課題もある。つまり、念仏が最上であるということを立証することが要請されている。ならば、この娑婆の全ての衆生にとって、念仏が最上であることを立証しない

といけない。そこで、善導の文を展開した選択本願念仏説や勝劣義などによって、念仏を最上であることを示し、浄土宗立宗をしているのである。つまり、法然は、全ての衆生に向けて善導が説いた専修念仏を立証・主張するため、選択本願念仏説を導入したものと考えられる。一方、善導の文では、九品皆凡の説や機の深心積があるように、凡夫に向けた専修念仏の主張であると考えられる。故に、勝劣義や浄土宗立証の明示がなくともよいのだろう。

このように、善導と法然の教学の相違の一つとして、専修念仏の主張・勧めが、誰に向けてなされているのかの違い（凡夫か、この娑婆の全ての衆生かの違い）があげられるであろう。

(22) この②では、「善導独総云念仏往生願」とあり、「善導一人「念仏往生の願」といつている」と述べているように見える。しかし、善導の著作には、第十八願を「念仏往生願」とは明言していないようである。これをどのように考えるべきであろうか。

右記の文の「念仏往生願」は、ほぼ意味をもっていない固有名詞のように捉えるべきではないと考える。これは「念仏して往生する願い」であり、右記の文は、「善導一人が、概して第十八願を、念仏して往生する願いである」といつている」という意味であろう。つまり、「念仏往生願」をほぼ意味をもっていない固有名詞のように扱っているのではなく、同語が有する意味として使用しているものと考えられる。

つまり、善導は、第十八願を、特別の十念でないといけない願いとしてではなく、期間や数に関係なく、とにかく念仏して往生する願いとして捉えているということである。これならば、整合的に読解できるので、予定より紙幅が増えてしまい、同書第四章は扱えなかった。その第四章以降は、続篇で検討したい。

【参照文献】

○安達俊英「法然浄土教における諸行往生の可否——『選択集』第二章・第十二章を中心に——」（『仏教文化研究』四一、平成八年九月）

『選択集』の教理構造基礎論（二）（角野玄樹）

- 石井教道『選択集全講』（選択集全講刊行後援会、昭和三十四年一月のち、平楽寺書店から出版。）
- 角野玄樹「『逆修説法』第三七日の本願解釈——選択本願念仏説・第十八願本体説・本願根本説——」（『佛教大学仏教学部論集』九七、平成二十五年三月）
- 同「『逆修説法』第五七日における専修念仏説の立証」（『佛教大学仏教学部論集』一八、平成二十五年三月）
- 同「『逆修説法』第二七日における八種義の成立」（『佛教大学仏教学部論集』九八、平成二十六年三月）
- 同「法然の選択本願念仏説の成立——〈法然の教えの精神〉——」（『佛教大学仏教学部論集』一〇〇、平成二十八年三月）
- 同「法然教学における但念仏と専修念仏との相違」（『佛教大学法然仏教学研究センター』二、平成二十八年三月）
- 同「『選択集』の教理構造基礎論（一）——第一章・第二章——」（『佛教大学仏教学部論集』一〇一、平成二十九年三月）

（かどの はるき 非常勤講師）

二〇一七年十一月十四日受理